

福井大学での 「保健体育」担当のおもひで

教育地域科学部 芸術・保健体育教育講座
吉澤 正尹

1970年は、大阪万国博覧会の開催に向けて巷には万博テーマソング「世界の国からこんにちは」があちこちから流れ、活気にあふれていたように記憶しています。この年、私が大阪から福井大学に赴任してきた年でもあり、自分にとって新たなスタートでもあり、この印象が鮮明に残っています。大阪万国博覧会は、日本で開催される国際的なイベントとしては1964年の東京オリンピック以来のもので、関西を発信源とした日本経済を発展させるものとして大きな期待を集めていました。

しかしこの年、外交的には1960年に調印した「新日米安保条約」を延長すべきか否かの大きな節目を迎えていました。この日米安全保障条約の自動延長に反対する労働者・学生・市民が参加した反戦・平和運動と並行して、大学内では学生が大学教育の改善を求めて大学と対立した大学紛争によって大きく揺れていました。

福井大学でもこれらの運動に純粋に取り組む学生も多く、授業が始まると直ぐに「この授業を討論会に切り替えてほしい」と毎時間のようにヘルメットをかぶった学生数名が教室に入ってくるという状況で、授業が正常に行なえるという環境ではありませんでした。しかし体育実技の授業では出席をとると直ぐに受講生が広がって移動しながら活動することもあり、特に大きな影響もなく通常どおりに開講していました。当時、体育科目は1～3年次に亘って4単位が必修であり、毎時間、必ず出席をとることになっていましたので、これらの運動に取り組んでいる学生も自分の受講すべき授業時間には欠席は少なく、他の受講生とともにスポーツを楽しんでいたように記憶しています。

大学における保健体育科目は、新制大学の発足時にアメリカ教育使節団の勧告により、当時の劣悪な衛生環境と学生の体位、体力の著しい低水準の改善を図る目的で卒業要件に最終的に追加されスタートしたものです。ところが1991年の大学設置基準の大綱化によって従来の保健体育「4単位必修制」が各大学の自由裁量に委ねられました。福井大学においても共通教育センターの発足に合わせて保健体育科目について全学的に検討され、全学

生に少なくとも2単位は教育・工学部ともに選択必修として残すべきであろうというところで合意されました。この時期に進められたカリキュラム改革で、かなり多くの大学が体育を必修からはずしてしまいましたが、最近では必修として履修させるべきだという考えが広がりつつあります。この背景には、現代の環境汚染問題、高齢社会の到来、ストレスに起因する心身症の増加、若年層の体力低下や機能の脆弱化などの課題に総合的に対応できる人材を社会に送り出すことが大学に求められていることにあります。

福井大学での保健体育カリキュラムは、改革に向けて1989年から4年をかけて保健体育教員全員で慎重な検討を行ない、「学生生活における健康の維持と増進を目指した身体運動の実践及び基礎的知識・技能習得を目的」として必修に位置づけました。その内容として理論と実践をふくめた演習として、大学内で年間を通じて行える活動と季節的な野外での活動を選択できるコースを開講したことは、十余年の実績からも正しい選択をしたと考えております。そのカリキュラム改革の方向を理解し、支持して下さった両学部の教職員の皆様に深く感謝しております。現状では転出による体育教員の減少、大学法人化にともなってこれまでご協力いただいていた非常勤講師に出向願えなくなったこと、非常勤講師予算の削減などによって、保健体育カリキュラム維持が徐々に難しくなってきております。前述しましたように、大学における保健体育が重要視されている中、福井大学における保健体育カリキュラムが発展的に継続されること願っております。